

思想・文化情況の(現在形)を射抜く
批判的視座を求めて

La Vue

No.3 (2000/09/01号)

発行人：山本繁樹
発行所：るな工房/シャノワール・カフェ(黒猫房)
大阪市東淀川区菅原7-5-23-702 〒533-0022
TEL/FAX 06-6320-6426
http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html
E-mail: YIJ00302@nifty.ne.jp

目次

- ◆ダンスに感応する関西での日々
～「観る身体」になるために～
小暮宣雄
- ◆セクシュアリティにおける「語り口」の問題、あるいは
「私の問題をわからせるには、どうしたらいいのでしょうか?」
栗田隆子
- ◆ビデオ『罪なく罰せられて
～婚外子の声～』を制作して
江上諭子
- ◆殺佛……………富哲世
- ◆音触りのすすめ……………小原まさる
- ◆風土と身体に刻まれた歴史感覚
……………大橋愛由等
- ◆編集後記
No.4は2000/12/01発行予定です。
■無断転載を禁じます■

ダンスに感応する関西での日々

「観る身体」になるために

芸術環境研究 小暮宣雄

もう一年以上前になるが、ダンスの「パフォーマンスと解説」

に来ていた伊藤キムさんと道後温泉に入ったことがある。その時彼が、ダンサーは世界で二番目に古い職業だってねと笑って言った。

彼の知人が道後温泉でストリップバーとして踊っていたことに話題が広がり

はしたが、芸術ダンスの鑑賞について、松山ダンスウエーブという市主催の企画で彼と語ろうとしていた私にはこのテーマは荷が重すぎた。

確かにオーケストラの語源が「踊る場所」という意味だったり、芸能の原点に舞踊があることは以前から理解していたつもりだった。でも、職業としてのダンサーと、一番古い職業だと言われたりする売春/セックスワークとの関係については深く考えたことがなかったのだ。

…天字受賣命、天の香山の天の日影を手次に繋げて、天の眞折を鬘として、天の香山の小竹葉を香草に結び、天の岩屋戸に槽伏せて踏み轟こし、神懸りして、胸乳をかき出で裳袴を陰に押し垂れき。こ



ここに高天の原動みて、八百萬の神共に咲ひき。…

ご存じ、天照大神が岩屋戸に隠れた古

事記の一節である。踊る衣裳の起源や踊る体が発する音の効果についてを考えさせてくれる所でもあるが、ここではすでに舞踊に観客が存在しているという注目に値する。「踊り子」には触ってはいけないという「ダンスを観る」快楽の基本的構造が出来上がっているわけだ。

セックスもまた身体の日常的でない動作によって生じる快楽だが、踊り手と観客というような区分はもともとはない。セックスを職業とする専門者が生じて、お客は参加することが原則となる。セックスワーカーがどうしてダンサーよりも古いのか。それはストリップダンスを観るだけの客のような、物理的には参加しない快楽者が出現していない時代からの職業だからかも知れない。なんて屁理屈をしようと思いつく。

6月10日天王寺の茶白山舞台にて、山梨県白州舞塾(現・桃花村)の玉井康成独舞「ザマ」の始まりを待っている時に、このエッセイを依頼された。玉井康成の舞台については、まず毎日つけている「アーツ日記」に書き、その一部をインターネットにあげた(ので、それを参照して欲しい)。

そこでも触れたが、原稿を頼まれたこともあって、どういう時にこのダンスは自分に届いたなあと感じ、どういう時に感じないかを意識しながら観ていた。

すると、観ている私にダンスが届くには、そのダンスに共振する自分の身体があるかどうかにかかっていることが分かってきた。つまりそこで私が「踊りを観る身体」になって初めて踊りについて語ることができるようである。

結局そこに物理的に居ても、実際は踊りの場に私が居たとはならないのだ。そしてその「踊りを観る身体」はダンスが始まる前から徐々に準備ができていくときもある。公演が始まるから、ある一瞬の動きや身体と音(光)との出会いがそれを引き出してくれることもある。

鑑賞し損なう原因は、世俗的な雑念などの時もあるし、制作の不手際や周囲の観客層など小屋環境のもろもろの条件にも左右される。しかし、一番大切なのはもとより眼前のダンスそれ自体である。

ただ、その次に大きく影響するのは、今までにどんな身体動作を自分自身の目で観察したり体験したか? によるように私には思える。その経験の中にある塊が、いま眼前にある身体によって数珠つなぎに引きだされるのだ。瞬時に私の身体が、過去に踊りを観た当時の身体の感応記憶と参照しつつ、眼前の身体の新鮮度や巧拙を覚えてくれる。

そうなればしめたものだ。自分を観る私の身体は、今までの他者の踊りを観た記憶

解放出版社

放送禁止歌

岡林信康「手紙」、赤い鳥「竹田の子守唄」から泉谷しげる「戦争小唄」…TV・ラジオから消えた歌と70年代伝説のフォーク歌手を追う! 規制したのは誰? 意外な事実が今—森達也著/デーブ・スペクター監修 定価1,800円(税抜)

環境レイシズム

本多勝一氏推薦! 恐るべき速度で進む人体汚染 朝日新聞記者による衝撃の警告 風砂子・デアンジュリス/ 本田雅和著 定価1,800円(税抜)

メッセージソング

藤田正著 定価1,600円(税抜) 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-9-103 (3291) 7586 Fax03 (3293) 1706 http://www.blp.co.jp

ゴッホの死は他殺

完全犯罪の仕掛人はゴッホ 田中一郎著 本体1,900円・四六判・上製・口絵24頁 ゴッホとゴッギャンとの運命の出会いから発展した耳切り事件そして自殺の謎まで事実を追って大胆に推理するセミ・ドキュメント。

出版クラッシュ!?

安藤哲也・小田光雄・永江朗著 いま出版界何が進行しているのか。論客によるホットなホットな超激震動談。 本体1,500円

大坂町人学者たちの伝言

柳田昭著 四六判上製・252頁・1600円十税

Miotsukushi 滯標

(内容) 中井竹山と履軒、麻田剛立、緒方洪庵など11人を取り上げる。「大阪を愛する人、大阪をも一度元気づけたい」と思っている人、是非この書を読んでいただきたい。新たに勇気づけられ、自信が得られることに間違いない。こんな大阪があったのかと驚く人も多いであろう。(大阪大学名誉教授 芝哲夫)

福井県内の俳人一〇、七五八人の人名、俳書、年表を「名簿・326頁」「俳人関係目録・264頁」「索引・119頁」の三冊セットで発行。

若越俳諧史稿

二〇〇一年一月刊行・予約受付中 元京都産業大学教授 湯岡孝昭著 価格七〇、〇〇〇円(税別)・B5判・函入

アリーフ 一葉舎

京都市左京区田中関町26 TEL075-705-0088 FAX075-705-0080 aleaf@skyblue.ocn.ne.jp

島尾敏雄と奄美

藤井令一著 奄美に二〇年間住んだ島尾敏雄。この間ヤマトシヤ/琉球弧を夢想し大きな足跡を残した。名瀬在住の詩人である著者はこの文学者の傍らにいて冷徹に観察する。奄美側から発信された島尾文学評として秀逸な本! 税別2,600円

奄美の入墨(刺突)

山下文武著 コンチネンタルな島尾婦人の入墨。著者は徹底して奄美の例を収集、詳細な解説と共に、南島民俗学として重要なテキストとして内外から注目されている。 税別3,000円

再考/琉球弧

「キョウ5号」A5判・880円(税別) 高良勉(沖繩)と前利潔(奄美)による巻頭対談は島尾敏雄の思想を含む琉球弧

神戸市東灘区本山中町4-14-19 TEL&FAX 078(412)2631 http://www.warp.or.jp/maroad/

編書房

江東区亀戸1-38-5-601 TEL/FAX03-3684-9124 発売:星雲社 TEL 03-3947-1021 FAX 03-3947-1617

丸善ライブラリーNo.328

現代のまちづくり

—地域固有の創造的環境を—

<9月20日刊行>

池上 惇・小暮宣雄・大和 滋 編
新書判・256頁・定価780円+税

「まちづくり」「地域おこし」とは、一過性のイベントによって人を集めることではない。「まちの生活」と「まちの芸術文化」の交差点を、そのまちのあらゆる空間で発見し、設計し、実現し、評価する活動である。本書では、地域経済・財政、文化行政、芸術文化経営の専門家を結集し、現代のまちづくりを考察する。

丸善株式会社出版事業部

TEL.03-3272-0521

URL: <http://www.maruzen.co.jp/home/pub/top.html>

や、他者との交わりによって身体に刻まれた体験によって、今だけの、私だけのものではすでになくなっている。
ひよっとしたら、古事記にあるような、踊る身体を眺める快楽に「はまった」先祖たちの感応した記憶までも尾てい骨あたりに潜ませて、私たちの身体は、ダンスを観る快楽をいつかりリースさせようと待機しているのかも知れない。*

■(こぐれ・のぶお) 芸術環境研究/大阪市文化振興話会座長。一九五五年、大阪市生まれ。今までの役人(自治省入省)人生では東京と福岡、徳島、宮崎を往復。やっとなら西に戻って五年目になる。十年ほど前から、継続的に様々なアーティストを観察するようになり、その記録を日記形式で書き綴っている。99年9月からは「アーティスト・カレンダー」(<http://www.arts-calendar.co.jp/>)に關西リポーター「こぐれ日記」として、毎月10本前後のレビューを掲載している。中でも関西の若手ダンサーには触発されることが多い。由良部正美はじめとする生きた舞踏の流れの他にも、岩下徹のワークショップ体験から出発した山下残や若井博人、あるいは黒子さなや北村成美、砂連尾理・寺田美砂子、クルスタシアにポボル・ウフ、B.S.O.O.、ジャンルも様式も現れも多様な振付家たちが、海外や関東などの交流も始まって、難波のトリイホールや京都の中京青年の家などの小さなスペースで新鮮な公演を続けている。あとは、その場に座り、いつ自分の体が「踊りを観る身体」になるのか、その瞬間を待てばいいのである。

セクシュアリティ/ジェンダー

セクシュアリティにおける「語り口」の問題、あるいは「私の問題をわからせるにはどうしたらいいの?」

栗田隆子

「わかる」ということ

性にまつわる事柄、すなわち英語でいうところのセクシュアリティ、ジェンダーについて「語らなければならぬのか?」という問いがあるならば、わたしは心のこわばりを感じながらも、「はい」と答えるだろう。この返事の意味、ニュアンスを伝えること、これがわたしのこの文章の趣旨である。

しかし

「心のこわばり」と「はい」という返事の関係についてわかるように説明するには、どうしても「私」を主語にして、既存の性にまつわる言説への違和感、戸惑い、それを感じた際の自分の状況、経験を語らないといけない。ここにひとつの罠があるのだ。

「私たちの問題をわからせるには、どうしたらいいのでしょうか?」これは20世紀初頭に女性の普通選挙権獲得運動をしていたアメリカ女性の言葉である。この言葉をアドリエンヌ・リッチが、「嘘・秘密・沈黙」のなかでこれほど女性の問題を言い表したものがあるか、と評価している。まさに女性の問題を伝えるにはその「問題をわからせる」というところからスタートしなければいけないことを、なかばいらだちながら彼女(リッチ)は語る。これはフェミニズムと半ば重なり半ばずれているジェンダーとしてセクシュアリティの領域(この二つも今は便宜上分けているが、この二つも明確に線引きできる概念ではない。ジュディ・バトラー『ジェンダー・トラブル』参照)でもまた同じことが言える。
この複数一人称を、とりあえず単数一人

称に書き換えてみよう。それは直接には運動体としての「私たち」とつながらない

「私」という意味をこめて、書き換えてみる。

「私の問題」

をわからせるにはどうしたらいいのでしょうか?

この問題を「わからせる」には「私」の「経験」を語ればすむ話ではない。というのは、おそらく私の経験は常に純粋に伝わるわけではなく、常に聞き手の枠組み、それ

は往々にしてある既存の言説に基づいた枠組みでの解釈を施され、その解釈はもはや私の問題意識そのものすらも否定する。

たとえばタレントの遙洋子が現在朝日新聞で連載しているコラム「遙なるフェミニズム」のなかで、こんなエピソードがある。

彼女が親しくしている野球選手に彼女の最近書いた本「これは間違いなく『東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ』であろう」を読ませたら、その感想として「こんなことを考えているからおまえは結婚できないんだ」と言ったそうだ。いくら私の経験や実感を話しても聞き手の枠組みに回収されていく

危険は常に生じる。そこで「私」を主張しても、単なる個別的なことで処理される

。そこで語る「私」はスタンダードを揺るがすものには簡単にならない。しかもその聞き手の枠組みというものは、独立に存在するのではなく語り手との関係が常にそこに介在し、時に「愛情」やら「心配」というフレーバーもかけられていく。

せきばど

既存の枠組みで絡め取られると書き、その既存の枠組みというものは語り手との関係があつてこそ存在すると書いたが、この既存の枠組みそのものが単純に言語化されることはない。というのも、これは先ほども挙げた「東大で上野千鶴子にケンカを学ぶ」のなかにもこんなくだりがある。

「意見はふとしたりはすみで簡単に対立する。(中略) 語り言葉の裏側のメッセージが本番中、痛いほど耳に飛び込んできた。『私は皆に好かれたいの。』/『女は黙れ。』/…(中略) 私にはこの第二のメッセージが気持ち悪くてしかたがない。/実は、人は、本来語り合わねばならないテーマではなく、違うところ議論をしていくのではな

いか? 議論を左右するのは、論理ではなく、第二のメッセージのほうだが、じつは語っていて、そつちのほうで勝負が決まることが多いのでは

ないか?」

セクシュアリティにおける言葉は常に語られていく。一見沈黙のかたちをとり、あるいは語り手の語りを誘導するかたちで、しかしどちらにも「語り」とは密接に切り離すことは出来ない。いわゆる「ロゴス」を絡め取る形での言葉、それもまたこのジェンダー・セクシュアリティの領域でうごめいているのだ。

「私」で語る良と「私」という戦術

性が 語られること、その問題意識に執拗にくいさがついていったのはやはりミシェル・フーコーだろう。

「私」のセクシュアリティを告白することが、まさに「語られる」という臨床医学的コードに乗っていること、そして「聞くもの」そして「黙っているもの」がその支配の鍵をにぎっているということを「性の歴史」の前半で描き、「私」で語ることの罠を執拗に明らかにしている。

しかし、ここでもフーコーが明らかにしているように性は時に沈黙というヴェールをまといながらも「語られている」のである。「セクシュアリティ」についてもこのようなきまなきなレベルでの権力が絡まっています。語りたくないが、しかしすでに語られてしまっているゆえに、語らずにはおれない。沈黙が賛意に変わるといふことはどうしようもない事実ゆえに、そこからの「語り」という戦術に向かう諦めと戦略。

むしろこの「語られた」性のディスコースへの「違和感」をどう伝えたいのか、



1956年創業
日本で一番早く出来たスペイン料理店

カルメン

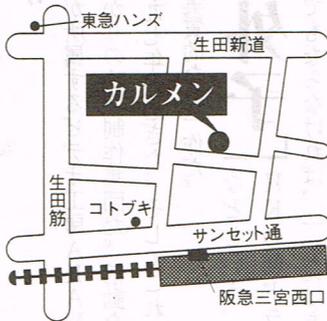
毎週月曜定休日、阪急三宮駅西口よりすぐです。
(月曜が祝日なら火曜休、火曜が祝日なら水曜休)

TEL & FAX 078(331)2228

〒650-0012

神戸市中央区北長狭通1-7-1

http://www.warp.or.jp/maroad/carmen/index.html



WEB「山口 椿の世界」ファンサイト

http://www.5a.biglobe.ne.jp/maoniao/tubaki/01.html

作家、画家、チェリストという様々な顔を見せる「山口 椿」。繊細なデッサンから枕絵、闇に迫る書物からポルノグラフィまで、その不思議に迫ります。執筆予定・イベント予定・既刊本目録や過去のイベントの画像など満載。

メールマガジン《カムロ カメリア》好評配信中

著者とゆふまどひ氏のご協力により最新情報やここだけでしか読めない書きおろし連載などの情報を配信。購読(無料)はWEBトップページから。

●その他、オリジナルポストカード・山口氏直筆画入り著作本などをご紹介しています。

いのうえなおこ STUDIO Fitz

inoue-mne@mvd.biglobe.ne.jp / TEL & FAX:078-302-4207

シャノワール・カフェへようこそ



残暑お見舞い申し上げます。
「猫に小判？」聞き耳立てて、ご来店お待ちしております。

黒猫房・房主 敬白

■Web「Chat noir Café」のサイトご案内

http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/index.html

- シャノワール・カフェ・サロン (活動内容・催事案内など)
- 『カルチャー・レビュー』12号まで掲載中
- 評論紙『La Vue』への誘惑
- 『哲学的腹ぺこ塾』(読書会)
- 増殖する『言葉の杜』叢書(論考・作品のアンソロジー)
- 現役書店人による『ショート・ショート・書評』
- 『ケンキョ』に書評
- 『黒猫房主の周辺』(身辺雑記)
- 黒猫房主のお薦めリンク集
- 黒猫の砂場(メイン談話室/毎日更新)
- 催事専用掲示板(毎日更新)
- 談話室バックヤード
- 「読書する黒猫」オリジナルTシャツ販売中
- るな工房/営業案内

■シャノワール・カフェグループ(るな工房・STUDIO Fitz)では、「商業出版」から「自費出版」まで、企画・編集・制作・DTP・装幀・デザイン・販促など、出版全般に関して請け負っております。ぜひ、一度ご相談ください。「La Vue」「カルチャー・レビュー」発行元です。

■TEL/FAX 06-6320-6426 E-mail:YIJ00302@nifty.ne.jp

■http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/koubou.html



本紙は、京阪神地区の主要書店(一部東京)・大学生協書籍部・図書館・文化センター等に配布し、配布状況は順次Webに掲載しております。

なお本紙は、読者の方の評価による「投げ銭」及び「木戸銭」というバトロンシップによって、発行するスタイルを模索します。頒価100円は、書店さんが販売している場合を除いては、読者の方の「投げ銭」の目安です。また、本紙の賛助会員として一口年会費1000円(1号~4号までの定期購読料+送料+投げ銭+特典)を「木戸銭」として申し受けております。本紙を確実に入手していただくには、この会員になられるのが一番です。また、一緒に楽しんでお手伝いいただける方を募っております。

■「投げ銭」「木戸銭」は、切手にても承ります。

■郵便振替:「るな工房」00920-9-114321

という問題、この文章のタイトルである「セクシュアリティの語り口」とは、まさにその戦術そのものだ。つまり語られてしまった言説という、あたかも下船不可能な船に乗りこんでしまった「私」がその言葉そのものと、その言葉が築き、築きつつある関係をどのように語りなおし、あるいは形成しなおしていけばいいのか?という問題なのである。

だからこそ。

再び「私」がでてこざるをえないのだ。別冊宝島の「ゲイの贈り物」のなかでセクシュアリティに関して伏見憲明が対談の中で次のように語る。

「ほんとにセクシュアリティというのは多様で、僕の理論というのはその多様性のひとつを、僕自身のセクシュアリティを言語化することによって提示したということではない」

「語りなおし」としての「私」の存在、この文章のタイトルにあるように「セクシュアリティを「私」で語る」と、それはたしかに既存の性の言説に対する武器になる。つまり、ある偏見、枠組みを壊すものとして、「私」が語られるのだ。しかしその「私」とは告白型のそれではないのだ。

その際の

語り口の模索は、まずどうしても否定形のようになってしまふ。つまり、こういう風にセクシュアリティを「私」で語ることは出来ない、というように。たとえば、「私」で語ることがあってもセクシュアリティについて語るもつとも適切な語り口であるという思いこみから、「私」のセクシュアリティについて語ろうとすること、これは、一見「私」を語ろうとして実はもつとも「真理」に近いセクシュアリティを語ろうという「理念語り」への誘惑となるのではないだろうか。

確かにセクシュアリティ一般というものを直接語ることはできない。それはフェミニズムがまさに「個人的なことは政治的なこと」というスローガンのなかで表明している。が、しかしフェミニズムの「私」を取り入れ、更に「セクシュアリティ」の語り口の探求を目指すという「私語り」はより正しい理念、「真理」への探求以外のなものでもなくなる。

「性を語る自分」というものを「性を誠実に考える探求者」として認識する(そして権力に絡め取られる)のはまさにフーコーの主張する「告白」の装置の一道具となつていくのではないか。「性」を語るというこ

とは目の前にいる相手に、どんな関係を結びたいのか照らし出してしまふ。または、それを無視して語るにより、その語りがたとえ「私」を主語とし、私をさらすというリスクを犯すにしても、それが単に「性を誠実に語り、探求する」姿勢から、そのような「私語り」をするのならば、それはまた違う形で「性を語るにはこの語りしかない」といった狭い姿勢におちいつてしまふだろう。「真理」への探求を目指させるそのような「私」とは「線を画したい。否定形で語ってしまう理由とはその真理への探求への身振りを否定したためだ。むしろ「真理」を分散させる、そのような「私」こそが語りなおしの戦術として用いられるのではないか。

戦術として

「私」で語る際のその「私」とはその背後には常に言説が執拗にまわりついている。そのまわりついている言説を敢えてあからさまにすることに、骨抜きにすること、それはフーコーが「監獄の誕生」で語った監獄の看守のいる塔に「人がいるのかいないのか」を囚人が調べなおすような作業のように思える。調べ

るには牢獄をぶち壊さないと駄目なのか、独房につながるれたもの同士でコミュニケーションできる独自の言葉を探すことなのか、また「無人」だと「賭け」で勝手に行動しはじめることなのか...

セクシュアリティについて語ろうとする行為そのものはやはりリスクだ。それは性が抑圧されているから、ではなくセクシュアリティについて語ることは、自分の日々遂行している行為そのものと直結し、揺るがされる可能性が大きいからだ。それはいろいろな会合で話される折にも常にその揺らぎがなせ起るのか?と問うよりその揺らぎから生まれる言葉の裏をまわらず、ひたすらつむぎ出すことが重要なのではないだろうか? それらの言葉はしばしば「わからなさ」がつきまとうだろう。あのウーマンリブの田中美津のラディカルな発言「わかつてもらおうとするのも、わかつてもらおうとするのも乞食の心」という言葉が想起される。安直な理解を退けるがしかし言葉は捨てないことが、いわゆる「真理」への探求からの距離を保つスキルのはじめのそしておわりの一歩なのかもしれない。

性を語るということは、ある種の科学的な「誠実さ」をあげられない、なんのために誠実に語りなければいけないの?と常に問い返されてしまふ。かくいうこの私の言説も「真理への探求」へと絡め取られてい

かない、という保証はどこにもない。性の語りはかくもリスクでそして実践なのだ

とつくづく感じる。

【参考文献】

- 『嘘・秘密・沈黙』アドリエヌ・リッチ、晶文社
- 『ジェンダー・トラブル』ジュディス・バトラ、青土社
- 『性の歴史1 知への意志』ミシェル・フーコー、新潮社
- 『東大上野千鶴子にケンカを学ぶ』遙洋子、筑摩書房
- 『ゲイの贈り物』(別冊宝島)、伏見憲明、JOC出版(現・宝島社)
- 『わかつてもらおうと思うのは乞食の心』田中美津、日本のフェミニズム 第巻「リブとフェミニズム」所収、岩波書店
- (くりた・りゅうこ)一九七三年、東京生まれ。現在、大阪大学大学院 臨床哲学コースに在籍。シモーヌ・ヴェイユの労働論についての修士論文を抱えつつ、教育・フェミニズムの分野について実践活動と同時の研究を続ける。また最近「応答」をモチーフとしたミニコミ「Ouda」を発刊。興味のある方は下記にメールをください。E-mail: ouidaRk@aol.com メールのない方はこちらへTEL: 0727-63-4763

「婚外子」差別

ビデオ『罪なく罰せられて』を制作して

江上諭子

■ぎっかけ

わたしが所属するビデオ工房AKAMEは女性ばかりの映像制作集団だ。活動を始めてから丸七年が過ぎた。そしてこれが、わたしの実質的な第一作だ。

「婚外子」

「男」というように性別のみが書かれている。両親が婚姻している場合は「長女」「次女」というように生まれた順番が性別に付く。以前は、社会保険の健康保険証や、住民票の続柄欄にもこのような差別表記があったが、現在はどの子どもの続柄も「子」に一されてる。

両親の名前の書き方にも違いがある。やこしいので具体的なことは省略するが、戸籍をみれば、両親が結婚しているのか離婚しているのかひとめで分かる。さらに結婚していない場合、父親が認知しているかいないかということまで分かる。この差別表記があることによって、結婚差別、就職差別がまだあるのが現状だ。

■私的体験

大学生のとき、父と父の一番上の兄との年齢が20歳ほど離れていることについてわたしが「おばあちゃんて、すごく長い間、

子ども産み続けたんだね。すごいね」と言ったとき、父がとても小さな声で「母親が違うから」と言った。わたしは「後頭部をハンマーで殴られたような」という表現がピッタリの、漫画によく出てくる「ガン」という擬音がピッタリの状態になり、頭の奥が「ジーン」となったのを覚えている。親の前では平静を装っていたが、大学へ行くために家を一步出ると涙が出た。歩きながら、あるいは電車の中で泣いていた。極度に混乱していたので恥ずかしいとは感じなかった。

わたしは、家族とか親戚のしがらみはうっとうしく切り捨てたいものと思っていた。実際、親戚との交流はあまりなく、うっとうしいことはなかったのだが、わたしが切り捨てるまでもなく、自分が切り捨てられていたのだということが悔しかったのかも知れない。親戚から嫌な目に遭わされたわけでもない。でも、中学校のころに行つたきり、要するに嫌な目にも遭っていないけれど、何かをしてもらったこともなかったのだ。そんなもんだと思っていたが、いまになってみるとすべてが分かつたような気がした。お墓参りにも行つたことがない。行きたいわけではないから大して気にもめていなかったが、行かなかつたのではなく、行けなかつたのかもしれないと初めて思った。

それから

親の前ではその話題はタブーとなった。聞いてみたいとはいくらでもあったが、親の前に出ると何も言えなかつた。それから何年後だったか記憶が定かではないが、思いきつて母に聞いてみた。「いままで何回か遊びに行つたでしょう。み



れ、いっしょに勉強して、さまざまな活動をしながらか自分の考えを整理していった。そしていきついたのは自分の中にあつた差別意識だった。わたしが父から事実を聞いて泣いた理由は「わたしがつて不倫でできた子どもの子どもなわけ〜! そんなの嫌だ〜!」ということだったのだ。そのころわたしは、すでにフェミニズムに傾倒していたが、結婚せずに子どもを産むということ、それも不倫というのでは耐えがたいことだったのだ。そういう自分を発見したことはなかなか刺激的だった。自分の価値観を相対化していくのはけっこう昔から楽しいと思えるほうで、自分の旧来の価値観が壊れて、新しい高みに上る瞬間が好きだったので、今回のヤマはけっこう高いぞと、少しうれいような感じもしたのを覚えている。「決着をつけてやる」という気持だったと言つてもいいかもしれない。その後偶然、ビデオとの出会いがあり、そのときに「婚外子の声を集めたビデオを作ろう」と決めた。それができたら、決着をつけたことになるかもしれないと思つた。

んな、私たちのことをどう思つていたのかな。母が教えてくれたのは一つのエピソードだけだった。母がいるの知らないで父の親戚が「あの子、そっくり!」と話していたという。私が父を産んだ母にそっくりだという意味で、母はすごく嫌な感じがしたそう。そして、初めて父を産んだ女性の写真を見せてくれた。私には、その人が自分に似ているかどうか分からなかつたが、同じところにはほくらがあつたので、それを母に言うとう母が絶句したので覚えてる。それは、私を悲しい気持ちにさせた。

■差別の対象化

その後は、本を読みまくつた。法律の本や戸籍・住民票についての本。そして女性たちがグループを作って婚外子差別と闘っていることも知り、入会した。親にはそんなに頻りに話せないし、友だちに話しても「親戚なんてうっとうしいだけだよ。いないほうがいいよ」と言われるだけで、わたしの気持は伝わらない。その会で話をしたとき、心底救われた気がした。心の面で癒さ

■作品について

制作したビデオに出演してくれたい。歴史上に残る裁判を闘っている。一人は東京高等裁判所で勝訴した中田千鶴子さん。もう一人は最高裁で敗訴した山田満枝さん。二人とも婚外子の相続分は婚内子の半分という民法九〇〇条四号但し書き前段の規定は憲法に反するという事で争つた。山田さんは敗訴しているが、民法九〇〇条四号但し書き前段の違憲性を最高裁で争つたのは初めてのことで、歴史上に残る裁判であることには違いない。

今回

制作したビデオに出演してくれたい。歴史上に残る裁判を闘っている。一人は東京高等裁判所で勝訴した中田千鶴子さん。もう一人は最高裁で敗訴した山田満枝さん。二人とも婚外子の相続分は婚内子の半分という民法九〇〇条四号但し書き前段の規定は憲法に反するという事で争つた。山田さんは敗訴しているが、民法九〇〇条四号但し書き前段の違憲性を最高裁で争つたのは初めてのことで、歴史上に残る裁判であることには違いない。

わたしは、このビデオで婚外子の「生の声」「生の思い」をそのまま伝えようと試みた。だから、説明的な部分は必要最小限に抑え、それぞれの方の発言をできる限り入れた。「婚外子差別とは何なのか」それを婚外子自身に語ってもらつた。

一方

山田さんは祖母の財産相続の「あなたの土地を売りたい」という突然の電話に驚く。山田さんが後で調べて分かつたことだが、祖母が亡くなったことを親戚は山田さんたち家族に知らせず、相続手続きに必要ということで不動産屋に関係者の名前を尋ねられたときにも山田さんたちも知らないで答えたそう。前年まで年賀状を出していたにもかかわらず。その後山田さんが事実を問いただすと「これはウチの財産だ。あなたには関係ない」と言われたという。

あと二人の出演者は屋代美智子さんと落合恵子さん。屋代さんは両親に捨てられていたこと以外、どんな事情があつたかは分からず、「捨てられた」という事実を苦しみ続けてきた。屋代さんは「二人(親)は、婚外子差別から逃げて」と語る。その言葉の中に、婚外子差別の非情さとそれに負けた両親への思い、そして屋代さんが受けてきた苦しみをにじませる。

落合さんの母親は一枚の皿を何時間も洗い続ける「強迫神経症」にかかつてしまつた。

婚外子である落合さんを生んだこともその病気の原因の一つだろうと落合さんは言う。婚外子差別があるために母は子どもに済まないと思ひ、子どもは自分が母親を苦しめていると感じる。差別の被害者が、苦しみの原因を「差別そのもの」に向けていることができず、お互いを苦しめ、自分を傷付けてしまうことについて語ってくれた。

■「婚外子」とは

「婚外子」と聞くとまず思い浮かべるのが「不倫」ということだろう。しかし、婚外子が生まれる状況はさまざま。たとえば、屋代さんのように父親が逃げてしまい、母親も育てられずに子どもを手離すような場合。中田さんの母親は結婚して中田さんの姉を生み、離婚後、妻である男性との間に中田さんをもうけたわけで、母親の財産を相続するときになぜ中田さんが姉の半分なのかというのには理解に苦しむ。相続額の差を設けるのは法律婚を守るためと言われるが、この二人の場合、守られるべき法律婚はどこにもない。

山田さんの場合もそうだ。山田さんは父親が婚外子だが、山田さんの父親の母、つまり山田さんの祖母は明治民法下、戸主の命令で何人も男と足入れ婚を強制されていたのだ。戸主の気にならなければ籍を入れられない。山田さんの父親の場合、戸主の判断で婚外子として生まれることになっ

たのだ。この場合も守られるべき法律婚はない。

では、

「不倫」の場合には法的な不利益は法を犯した当事者に与えるべきことが原則だ。もし「不倫」がいけないというならその当事者を罰するべきだろう。すなわちその父と母を。わたしは男女の関係を法でそれも刑法で裁くのはおかしいと思う。だから姦通罪が廃止になったのは正しいことだと思っている。現在、「不倫」によって子どもが生まれた場合、子どもの戸籍にそれと分かるように書かれる。そして、婚外子は婚姻内で生まれた子どもの半分の価値であるということが民法に書かれている。

「不倫」は夫婦の貞操義務に反することであって、「不倫」をした当事者、つまり夫または妻による配偶者への裏切り行為なのだ。子どもには関係がない。重ねて言うが「不倫」がいけないというなら、なぜ買春などの行為が取り上げられず、子どもができた場合のみ子どもに不利益が与えられ、その母親が罪の意識にさいなまれなければならないのか。なぜ相手方の男の存在は不問にされるのか。矛盾だらけである。

■むすび

このビデオは、婚外子とその母親に向けた応援メッセージだ。ぜひ、これらの人に見ていただきたい。もちろん、この問題についてまったく知識がない人にも分かるように作ってあるので、多くの人に見ていただきたい。そして、これが「婚外子」だけの問題ではなく、戸籍にかかわるわたしたちすべての問題であると感じてもらえればうれしい。

第一回の

上映会を3月18日に行なった。その時には、落合さん以外の出演者の方々に来ていただき、シンポジウムを行った。ライブの迫力はさすがで、ビデオの何倍ものインパクトを持って、婚外子の生の声や思いが会場に伝わったと思う。

このビデオをシンポジウムの様子も収めた冊子付きで、8月に発売した。上映権付

価格(有料・無料上映会と無料貸出が可能) 一万二〇〇〇円。個人価格(個人視聴のみ) 三〇〇〇円。

■おまけ

ビデオ工房AKAME新情報!
「Go Women go」

市民とメディアアクセス(VHS 25分) 上映権付価格一万円。個人価格三〇〇〇円。一九九九年六月、わたしともう一人のAKAMEのメンバーは、サンフランシスコ市とパークレー市を訪ねた。市民ならだれでもケーブルテレビで番組を流せる「パブリック・アクセス・チャンネル」というものがあるということを知り、視察旅行に参加したのだ。

アメリカでは、この市民のアクセス権が法律で保証されている。番組内容は玉石混交だが、環境問題、教育問題、健康問題、女性問題、同性愛の問題など、さまざまなテーマが扱われている。番組を作っている市民プロデューサーや、市民の番組づくりを支援するNPO(「アクセス・センター」)で働くスタッフの話からは、パブリック・アクセス・チャンネルを心から楽しんでいるのが伝わってくる。この作品では、パブリック・アクセス・チャンネルの仕組みを解説しているだけでなく、市民が作った番組をたくさん紹介している。

付記。先日、サンフランシスコから電子メールが来た。この作品をパブリック・アクセス・チャンネルで流してくれるそうだ。日本ではそういう場はまだ少ししかないが、アメリカでなら今すぐ流せるんだなと気がついた。

■(えがみ・ゆうこ) 一九六三年、東京都生まれ。写植の会社を転々としながら関西へやってきた。女性による女性のための映像制作集団「ビデオ工房AKAME」の創立メンバーの一人。ディレクション、撮影、編集のすべてをメンバー内でこなす。AKAMEがいままでに扱ってきたテーマは、離婚、従軍慰安婦、働く女性、在日朝鮮人女性、など。99年に行われた山形ドキュメンタリー映画祭で韓国女性ドキュメンタリストたちと知り合い、来年に向けてシングルマザーをテーマにした作品を日韓で共同制作する予定。
「ビデオ工房AKAME」http://www2.osk.3web.ne.jp/akame/ E-mail: akamev@osk.3web.ne.jp

現代詩

殺佛

富哲世

ぶらんこを啜えたまま静止した空が
虹色のとかげの汗をにじませている
灌木のみちから
村に入る
村はずれでは
こま鳥の尾のように
その名はうつくしくもないという
大切な動物が飼われている。
受話器の向こうで
草いさがれが叫ぶ昼に
御幣のつなで星を飾る
ゆたの家
甕をいだいた
あばたの家。
待ち合いの室の
買い物袋の仮面のおくで
神妙な瞳が
いくつもこちらを見ている。
ひとだから
もういちど
馬の尻の穴からでも
あの世の景色をのぞいてみたい。
蛇を払った広場で
歌手たちは腰をかがめて
雨と宴の準備をしている。

(詩集「殺佛」より)

■(とみ・てつよ) 神戸市生まれ。獅子座。O型。
詩集「血の月」(蜘蛛出版社、一九九三年)、「天人五衰」(ルナ企画、一九九九年)、「殺佛」(ルナ企画、二〇〇〇年)。

いのちジャーナル別冊MOOK②

薬害が消される!

—学校が教えない6つの真実—

全国薬害被害者団体連絡協議会編
定価: 本体1000円+税

サリドマイド、スモン、HIV(薬害エイズ)、陣痛促進剤、MMR(新三種混合ワクチン)、CJD(薬害ヤコブ病)。日本を代表する6つの薬害被害者たちが学校教科書を調べ、薬害の記述が教科書検定で削除されている事実をつかんだ。それはいったいなぜなのか。これ1冊で、日本での薬害統発の秘密がわかる!

さいろ社

神戸市東灘区岡本7-2-10 TEL/FAX.078-453-6796
http://www2.osk.3web.ne.jp/sairo/

音触りのすすめ

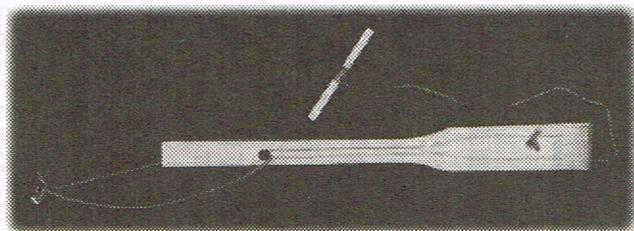
1 ムックリ

アイヌの楽器に、ムックリ(註1)と言うのがある。同系なのは、フィリピンや台湾そしてシベリア地方、さらにはネパール等にも見られるという(アイヌの音楽を含むアジア圏の音楽の共通性には興味があるが、ここでは触れない)。竹製で短い紐がついていて、口に銜えて紐をリズムカルに引くことで、ピョンピョンという音がする。やってみると意外にむずかしいが、自分の口の中への響かせ方などで、実に微妙な音の変化を楽しめる。この単純な楽器は、とても豊かな音との遊びの体験を与えてくれる。何か自分の頭蓋骨まで、共鳴箱になってしまう感じなのだ。

ムックリは、

北海道の観光地で五百円くらいで売っているから、それ自体に骨董的な価値があるようなものではない。しかし音楽というものを別の次元から体験させてくれるのだ。意外な音との遭遇の楽しみ、そしてその音をコントロールすることの楽しみ。自分が今感じている音を、自らの行為によって変化させることが、とにかく面白い。この楽しみをもっと持続させたいから、リズムをキープし、紐に伝わる反動をうまく利用する。だんだんいい音がする。心も自然に弾んで来る。音とのこんな楽しみ方があったのかと思う。

ムックリで遊んでいると、国産初のアナログシンセサイザーが売り出された頃、音程を固定して、フィルターを動かしたり、倍音の構成を変化させたりするのが、とても面白かったことを思い出す。旋律もリズムも和音もないが、音色を少しづつ変化させることそのものが楽しみなのである。初期のシンセサイザーでは、そもそも和音なんて出せなかったから、こんな遊び方の中



「ムックリ」

北海道阿寒、鈴木紀美代さんの製作。

写真は「楽器屋 JUNJUN」提供。

〒953-0015 新潟県西蒲原郡巻町松野尾256

TEL/FAX 0256-72-4607

http://www.info-niigata.or.jp/junjun/

小原まさる



音楽には、

聴く楽しみと演奏する楽しみがあるが、音楽の何を聴いているのか、演奏するにしても、その行為の中で、演奏者自身が何を楽しんでいるのか、また聴く者に何を聴かせているのかという点を考える上で、ムックリは重要な体験をさせてくれると思うのだ。この楽器のつくり出す音楽は、単純なリズムと音色の変化だけで、十分に楽しい音の空間を存在させているし、耳には聴くことによる快感を与える。そして音の粒が揃わないほうが、楽しみは大きいかもしれない。耳は音色の部分の微妙な変化を楽しもうとしているからだ。聴く行為においては、耳が(脳が?)音楽のどの部分にその聴覚を集中するかによって、極端に単純な音楽の中にも、如何様にも楽しむべき深みが存在する。そのことをムックリは教えてくれる。

コンピュータにサンプリングした音の波形を画面に表示すると、軸の置き方で雲の固まりの様に見えてくる。だがその表面はデコボコだ。サンプリングレートを上げれば、おそらく決してその複雑さをあきらめない波形がさらに現れるであろう事は、想像しやすい。私達の耳は、このデコボコの表面の肌触りをどこまで感じられるのか。

音そのもの

がこのような複雑な姿

を持ち、それに構造的な複雑さをもたらすから、情報としての音楽は、さらに多層的とでもいう形態をとる。したがって、私達がCDを聴いたり、演奏会で音楽を楽しむ場合、当然ながら、一度にどうしようもない程の膨大な情報を、ともかく受け入れるのを余儀無くされているはずである。逆に言えば、音楽を聴くという行為そのものには、限り無い可能性と多様性があるという

ことになる。しかし、いわゆる古典的な音楽の鑑賞では、私達の耳は、旋律、和声の技術、曲の構成、場合によっては歌詞等を、音楽の進行に合わせて、音の中から選択して読み取ろうとするようになる。できれば、作曲者の意図や演奏者がその曲をどのように解釈しているのかまで読み取れば、より一層の喜びもあろうし、どうして歴史的にこのような音楽が現れたのか、その誕生の物語まで、パンフレットや本で勉強すれば、音楽的教養もさらに深まるに違いない、と努力してみることにする。

読み取り

の行為が、一般的に何らかの解読装置を必要とするならば、聴衆がこうした形での音楽体験をするためには、多様な水準での訓練が必要だと言えよう。しかも、音楽の持つ膨大な情報の中から、聴く者は、ある特定の情報を読み取るべく仕向けられ、音楽と向き合い、格闘する。けれども、私達に向けられたこうした読み取るべきもののために、音から得られるすばらしい快感を、つまり、音そのものを楽しむ機会を、私達はしばしば逃しているのではないだろうか。過去のロックやある種の実験的な音楽は、強烈な音や沈黙、音の偶然性や即興性を用いることで、こうした状況を打破しようとしたと言えよう(最近のポップスに関しては、僕には別の見解がある)。

3 音触りの快感

音と

出会うこと。音を自然なものとして受け入れること。草原や川

岸で奏でるのに何の不思議もない音楽。それらをイメージするだけで、心は和む。なぜならその時、耳が自然に音という現象を受け入れているからだ。その音楽は、聴く者に解放され、その音を自由に味わい楽しめるからだ。しかし、基本的にどんな音楽でも、音という現象の上に存在している以上、耳のもつて行き方で、つまり、音楽のどこを聴くかによって、音触りの快感を楽しめるはずだ(それこそ、ムックリが私たちに教えてくれることだ)。たとえば、ロッ

クだったらジミ・ヘンドリックスのギターのみずみ、ジョン・レノンのシンプルなピアノの余韻、古くて申し訳ないが、こうした音は、その音そのものが、ムックリの音のように、僕の音の性感帯をくすぐる。Kinoの澄んだ声にだって、僕には声の地肌を触るような快感がある。ピーター・ガブリエルの音楽は聴くことの楽しみを提供してくれる音の宝庫だ。もちろんブライアン・イーノも興味ある素材だ。

そんな

ことを言うんだったら、

って演奏家ごとに独特の音色や声があるということになるだろう。その通りなのだ。それは聴き方次第なのだ。しかし、あまりにもコントロールされた音楽では、その表現のために駆使される作曲上あるいは演奏上の磨き抜かれたテクニクのために、しばしば音の素顔が見えなくなる。また、音楽によっては、こうした楽しみをあまり許さないものもある。その許容度に差があるのだと思う。楽しめる音楽とは、聴く者に、聴く楽しみを自由と与えるべく工夫されたか、意図せずとも、そのような性質を備えた音楽であり、聴く者のために、音の中に手付かずの部分を残してある音楽とも言えよう。そのような音楽は、同じ曲でも、その時々によって、異なった体験を与えてくれる。そして、録音されたものでも、十分ではないにしろ、繰り返しの楽しみに耐えるのである。

(註1)「口琴」と呼ばれる楽器の一種。インターネットで探せば、その音を聴けるホームページもある。

(註2)モンゴルで「ホーミー」と呼ばれる唱法。アジアの他の地域でも同種の唱法が見られるが、それぞれの地域ごとに呼び名が異なるようだ。喉歌、あるいは音の現象面から見て、倍音唱法(この呼び方がここでは適当だと思う)とも呼ばれる。本格的な演奏は決して容易なものではない。

■(こはら・まさる)某教育機関で、コンピュータ・ネットワークのシステム管理を仕事にする傍ら、コンピュータのための(同時に人のための?)音楽の記述方法を思索中。また最近「シンパズ工に病院用ベッドを贈る会」等のNPO活動に参加している。

http://www.sun-net.or.jp/masaru/zim/index.html

風土と身体に刻まれた歴史感覚

琉球弧の思想的〈現在〉

大橋愛由等

沖繩

サミットも終わり、沖繩は日常の世界に戻ったようだ。日常というのは、サミットが開催されようとしてまいと、今後とも米軍基地が沖繩に集中する現実には変化はないという意味である。この小文では、サミットを前後して、沖繩・奄美などから発信された言説を踏まえ、琉球弧(註1)の住民が、なにを考え、なにを

目指そうとしているか、わたしなりにまとめ紹介していきたいと思っている。

一連のサミットがらみの沖繩報道の中で、わたしは二人の言説に注意してみた。まずその一人は、小説家の目取真俊である。目取真は、作家であるとともに、沖繩やヤマト(本土)のマスメディアに状況論を書き、そして発言している思索者としても注目されている。沖繩サミットを「幻想物語」(朝日新聞二〇〇〇年七月二十五日、大阪本社版・夕刊)と位置づける目取真は、「サミットが辺野古への基地建設とリンクしたものであることは、大半の沖繩人が認識していた。ただ、そのことへの疑念やこだわりは、サミットへの同調圧力の強さに抑え込まれていた」といった見識を示す。

日本国の沖繩戦略は明確である。大江健三郎との対談の中で「日本の保守派が、日本と沖繩の関係でいざばん望ましい」と考えているのは、政治・軍事・経済の面においては、沖繩は従属的であるが、文化の面においては、政治的に無害であるかぎりそれを華やかに持ち上げよう、というものでしよう」(『論座』二〇〇〇年七月号)と発言する。つまり、最近盛んに喧伝されている沖繩からの文化発信は、日本国家承認の範囲であり、文化ごときでは政治的・軍事的に無害であるから許容されているのだろうという見識である。

沖繩において若者文化が隆盛であるのは、

沖繩社会が急速にヤマト化し、沖繩のなかで沖繩らしさが失われていく状況のなかでこそ生まれた、若者側からの反照として提示された文化的リアクションであるとの側面も忘れてはならないだろう。足許の沖繩にまなざしを向け、自ら沖繩なるものを編集し、新たな「チャンプルー文化」を創出しているということは、沖繩が、まだ全国一律化に対して、リアクションが想像されている分、(これが最後であるかもしれないにせよ)健全であると評価できる。こうした動きに対して、目取真は、自らの立場が「華やかに持ち上げ」られている側に立っていることを自覚しつつ、醒めた視線を投げかけるのである。



〈民族の物語〉は風土に刻印されている。

目取真の

批判眼は、沖繩そのものにも向けられる。日本がサミット出席国の中で唯一のアジア代表であるから、中国首脳を呼ぼうという動きが沖繩側にあった。この発想の背景には、沖繩人の歴史感覚があると思われる。つまり、かつての琉球王国は、十七世紀以降、実質的な外交権は薩摩に握られていたが、建前上は、中国と冊封関係(註2)にあった。こうした歴史関係から中国に対して親近感と若干の思慕の念が働いたのだろう。しかし、目取真は「明治以降の日本帝国主義が中国に何をしたのか、その一翼を担って沖繩の人は中国に何をしたのか、

その反省はすっぱり抜け落ちていた。過去の歴史だけでなく、現在、沖繩には巨大な米軍基地がある。それは、中国にとつて大きな脅威です。そういったことを問わずに中国にアプローチするような感性、反省意識のなさは一体何だろうと思ひますね」(前掲誌)と手厳しい。さらに「この無反省と、守礼の門が紙幣に印刷されて喜ぶ

長で、稲嶺恵一沖繩県知事の政策参与でもある比嘉良彦は、「サミットの沖繩開催は、「日本」と「琉球」を隔てていた歴史の完成を図る最後のチャンス」(読売新聞二〇〇〇年七月五日、大阪本社版)と位置づけている。比嘉は、高良倉吉琉球大学教授らが中心になって提案した「沖繩イニシアティブ」を評価する。これは沖米軍基地の存在を評価しつつ、基地の過重負担の軽減を目指すものである。こうした沖繩側からの新たな発言を踏まえた上で、沖繩サミットは「沖繩県民が国際社会の常識を共有できるか、そして日本と琉球の間に歴史的和解の道が開けるか、という重要な転機になる」(前掲誌)と前向きに捉えている。

琉球弧の

人たちは、ヤマト

の歴史を簡単に忘却しようとする。風土と身体に刻まれた歴史感覚は、いつでも明確に日常生活の「いま」に呼び出す準備ができています。日本と琉球との間の歴史的和解とは、「薩摩の琉球侵攻(一六〇九年)」、「明治政府が薩摩置置で「沖繩県」を置いた「琉球処分」(一八七九年)」であり、「悲惨な沖繩戦後の二十七年間にわたる米占領」(前同)といったヤマトが琉球に沖繩に対して行った一連の処分の経緯と事実を、もう一度ヤマトと共に直視し共有していかうというものに違いない。

比嘉は、沖繩サミット開催が決定した去年が「薩摩の琉球侵攻(一六〇九年)」からちょうど三九〇年後にあたる年であったことに意義を求めようとしている。つまり「今、沖繩の言論界では、二〇〇〇年の今年から侵攻四〇〇周年までを「アイデンティティーを探る十年」と位置づけ、歴史を問い直そうとする動きが盛んになりつつある」(前同)というのだ。

沖繩として琉球弧の住民にとつて、この一六〇九年の歴史的事実は重い。詩人で思想家の高良勉は「いま、ぼく(たち)はむしろ沖繩は薩摩侵略以来、「植民地体制」の下にあり、「奴隷の解放」は未だならずという自覚を持つ必要があると思います。自らの内部の「事大主義」と奴隷根性を克服し

ない限り、思想的には大きく前進しない状況に直面しています」(「確立できぬ民族主義」琉球弧からの発信「御茶の水書房」という発言に接する時、沖繩の人たちにとつて、薩摩侵略が決して過去になつていないことを伺い知るのである。

この一六〇九年の意味の深さを沖繩以上に認識しているのは、琉球弧の最北部に位置する奄美の住民ではないだろうか。一九九九年五月、奄美大島北部の津代という場所、薩摩軍との戦いで死去した奄美の先人への供養が、本処あまみ庵の庵主・森本眞一郎を中心とした有志によつて、三九〇年ぶりに挙行されたのである。ここは、琉球国へ軍事侵略を目指す薩摩軍が、初めて琉球国内で戦闘をおこなった場所なのである(当時の奄美は琉球国の領土だった)。

奄美の歴史的苦難はこの戦闘より始まった。薩摩は、奄美を琉球国から割譲した後、税収獲得の円滑化のため、農業の効率化を図るなどのプラス面の施策も展開したが、大型船の建造を禁止し、奄美人の海洋性を抹殺するなどして、徐々に植民地的収奪の対象地として支配強化をはかっていく。幕末、天文学的な累積債務に悩む薩摩藩は、二度にわたり「黒糖惣買入制」を実施する。これは、大坂市場において高値で取り引きされていた黒糖の増産を奄美諸島に強要し、税として納める以外の黒糖もすべて薩摩に差し出すよう厳命した制度である。二度目の実施である一八三〇年から一八七二年までの四十三年間、黒糖地獄といわれている。税の取り立ては熾烈を極めた。この結果、薩摩は借財を短期に返済した上に、潤沢な倒幕資金までも用意することが出来たのである。

明治に

なつても奄美の苦難は続

県に編入された奄美は、引き続き西郷隆盛らによつて、黒糖収奪が続けられる。明治二十年代になつて展開された「三方法運動」(註4)の権利主張によつて、ようやく黒糖の勝手販売が進んだものの、鹿児島は、税収入が鹿児島本土より少ない奄美地方に対して、「特別経済体制」を施行

(一八八八年)。歳入にみあった額しか県費を歳出しないという差別政策を行った。歴史研究者の西村富明は、これを「奄美処分」と呼んでいる。一九四〇年になってようやく奄美に関する予算は鹿児島県の一般予算から捻出されるようになったが、実を挙げることもなく戦局悪化。戦後は、一九四六年から一九五三年まで米軍統治下に。この時、奄美人みずからによる「奄美ルネッサンス(活発な文芸・演劇活動)」がおこったものの、教育やインフラストラクチャー整備の遅れは、本土との決定的な格差を生むことになった。

日本国へ復帰してからは、奄美群島振興開発特別措置法(通称「奄振」)が国庫から出され、インフラ関係は本土並みになった。公共工事中心のいびつな産業構造を産みだし、奄振だのみの建設業者は増加したが、新たな産業は育たず、人口減と既存産業の衰退が目立っている。

こうした奄美の歴史を、もう一度奄美人みずからが見つめ直し、二〇〇九年に向けた奄美の四〇〇年のこしかたを総括しようという動きが始動している。薩摩・鹿児島を過去の告発することも含め、未来の奄美像を構築していこうとする「民」の側からの捉え直しである。しかし、奄美の困難さというのは、沖繩よりある意味で深刻かもしれない。沖繩が独立した行政体(沖繩県)を持つなど確固とした地域実体が確立しているのに対し、奄美は今でも鹿児島県の中に所属していることから始まって、鹿児島に深く取り込まれているからである。これは、ひとつ行政面ばかりではなく、人々の日常性や思惟の奥深くまで鹿児島が分け入っていることを意味する。その結果、奄美の人たちは、自らもヤマト化を強烈に進めてきたこともあって、「奄美人」というアイデンティティを確立することすら、容易ではない現状となつてしまっている。

沖繩・奄美の 側からの二〇〇九年に向けた歴史と民族の捉え直しについて、今後どのような思想発展を遂げるか引き続き注視していきたい。しかしわたしは同時

に以下に関することも指摘しなければならぬだろう。かつて保守陣営が明治百年(一九六八年)を迎えるにあたって、「近代化の成功を美化し、台湾、朝鮮、中国へと侵略を重ねることによって「世界の一等国」になったことを「記念」し「祝賀」した犯罪的ともいふべき行事(飛鳥井雅道『歴史公論9・特集/自由民権運動百年』一九八一年)を行ったことを想起する時、沖繩・奄美の場合も、今は「民」の側からの表現運動であるが、いつのまにか日本国による沖繩・奄美併合を正当化する国家イデオロギに塗布される危険性があることを。むしろ琉球弧の住民が参考とすべきは、一九八一年に行われた「自由民権運動百年」を顕彰する発想と思惟ではないかと思っている。

このような 琉球弧住民の歴史と民族の

読み直しは、私にとっても無縁ではない。一九九五年神戸で阪神大震災に被災したことをきっかけに、震災前からならんかの形で奄美にかかわっていた神戸生まれのわれわれ四人が、「神戸奄美研究会」という民間の勉強会を結成した。震災で機能不全状態になった神戸という街をもういちど自分たちなりに捉え直そうというのが結成趣旨であった。なぜ神戸を考えるのに、奄美かという、神戸という都市が重工業都市として発展する過程において、奄美から底辺労働者として大量に神戸に移住。生活者としての彼らの動向を知ること、近代化に邁進した神戸という街、そしてひいては近代という時代を見ていこうという発想なので



ある。現在、関西在住の奄美出身者のほうが、奄美諸島の人口より多くなり、関西が「もうひとつの奄美」の様相を呈している。そのため、奄美の動向と神戸の奄美社会とは、共時的な連関を示しているのである。奄美・沖繩の人たちは、二〇〇九年に向けて、「民族の物語」を復唱しようとしている。彼らは、過去の受苦を、薩摩侵略四〇〇年後」というメルクマールに向けて再算すると同時に、次の世代に向かって新たに記憶を継承させようとしている。こうした行為こそ、わたしのように阪神大震災の記憶を、忘却することなく次代に継承させようとしている者にとつては、「ひとつごと」ではないのである。

(註1) 琉球弧小説家の島尾敏雄が扱った用語。ヤマトを基準として「南西」諸島や「南島」と呼ばれる島々の島々という意味でこの言葉に言い換えた。このコトバは、地域の主体を芽生えさせる効果をもたらす。沖繩のイデオロギーや表現者によって熱く迎え入れられ、思想・表現の武器となつていった。

(註2) 冊封関係に中国王権に恭順の意をあらわすことよつて、国王に封じられる(任命される)関係。琉球と中国は長くこの関係を続け、王が変わるごとに冊封使が来琉。その滞在は半年にも及ぶ。財政的な負担に苦しめられたものの、沖繩の古典芸能である「組踊」の誕生と発展を促すなど、文化的な貢献もあつた。

(註3) テーゲの性格描写には「おおらかなものこと」にこだわらない、(楽天的な)と(いいかげんな)という相反する特質が内包されている。沖繩では、前者が強調される。しかし奄美、鹿児島と北上するに従い、後者の意味合いが強くなる。

(註4) 三方法運動(薩摩藩)にとって重要な収入源だった奄美の黒糖を、明治になっても収奪を続けるため、表面は南西興産商社との契約の形をとる、藩政時代と変わらぬ方法をとった。鹿児島県も条例制定などで支援。しかし大阪の商人などが、直接奄美に入ることで、権利意識に目覚めた奄美人は、「明治二十年代」、島民による勝手販売、「喜界島凶徒聚衆事件」といった直接抗議行動、司法による訴訟などで自らの要求を勝ち取つていった。

■(おおはし・あゆむ) 一九五五年、神戸生まれ。新聞記者、出版社勤務を経て、一九九〇年、図書出版「まろうと社」を設立。現在、神戸市在住。著作に「阪神大震災と出版」(共著・日本エディタースクール刊)。同社では定期刊行物として奄美研究誌「キョロ」を発行。最新自著に、句集「群赤の街」(雷岡出版刊)がある。
#nifty社 | E-mail:maoad@warp.or.jp | http://www.warp.or.jp/maoad/

■本紙は●哲学/思想●文学●詩●映画●舞踏/ダンス●演劇●音楽●アート●コミック●生活●医療福祉●教育●スポーツ●インターネット●フェミニズム●セクシュアリティ●風俗●出版などをテーマに、思想・文化情況の(現在形)を各執筆者のトボス視点から批判的論評を試みます。そして表現を通して「他者」との交差、あるいは「視座」の交換、相互性を志向します。
また本紙は、オンラインマガジン「カルチャー・レビュー」(http://member.nifty.ne.jp/chatnoircafe/review1.html)とリンクしておりますので、併せてお読みください(「ヤフー」他のウェブ検索で「カルチャー・レビュー」あるいは「黒猫房」のキーワードで簡単にヒットします)。
■2号内容(2000/06/01発行)
◆ジェンダー・立ちすくむ経験/落合祥亮◆フットボールの進歩について/山口秀也◆商品の呪術的性格の脱魔術化に向けて/平野真◆ヘーゲル「神現象学」は(超)娯楽読み物である/佐野正晴
■4号は、2001/2/01発行予定です。
■本紙への感想・投稿・叱咤・激励・投げ銭・木戸銭など、熱烈歓迎。
■本紙3号および「カルチャー・レビュー」の合評会を10月14日(土)午後2時より行いますので、奮ってご参加ください。場所等の詳細は「カルチャー・レビュー」のウェブで確認されるか、「るな工房」までお問い合わせください。

編集後記

★現在の私にとつての編集作業は、とにかく版下のフィニッシュが一番大切なのであるが今の時点でまだ途中。「編集後記」の原稿も言われても……。余談であるが、作家・山口樗牛氏に傾倒するあまり古書店の認可を申請中。近々ネット書店を開業予定。乞うご期待。(いのうえ)

★この世界に文化の多様性がなかったらつまらないだろう。何か違うものに出会えるから人は旅への魅力を感じるのだ。急速な情報化と経済のグローバル化や国を越えた経済圏の広域化は、情報や資本の流通のための標準化を多くの局面で促し、個々の文化の存立を危うくするように見える。だからと言って、たとえば今国家に着目しても、何の回答も得られないと思う。マイナーな文化はすでに国家によって標準化の洗礼を受け、時には分断されて来たのである。しかし一方、政治は時に文化的同一性に自らの根拠を求め、だが文化はその複合性と流動性ゆえに生き延びるのだ。(小原)

★ある凄まじいダンスを見て、もうこれからは率直に言葉を使い、背筋を伸ばして向きあいたいと考えたのもつかの間、言葉の仕様が測りきれぬうちに、率直のありかを探しあぐねる。そのくせ誰かの想いが集まってきたら、恋心についてしゃべりちらし、いつかの君の気持ちが好きたと書いたその足で、逃げ去るタクシーを追いかけている。今だけのものでも、私だけのものでもない、と小暮さんが語る「踊りを観る身体」と、「性」を語る未来のほうから思いをめぐらす栗田さんの「私」を、何度も交換し、現在という体験への貴重な資料とした。(加藤)

★日夜仕事でいろいろな人たちの悩み事を聞いていて、そこにいろいろな偏見が混入されていることに気づく。たとえばゲイなんかは、当たり前のように差別対象として現れる。それを言うのは、「在日」韓国人、朝鮮人差別、障害者差別、部落差別などとはまったく別の次元で、つまり、そのことを「差別ではない問題」として気軽に冗談として語る。「バツイチ」なんかも気軽に笑いの対象になる。性や家族の問題は、我々の社会生活の根本を支えているから逆に見えなくなっている。というか、見たくないんだ。(田中)

★うちの二歳になるこどもは、さまざまな方法で「おんぶ」を確かめている。鏡に映る自身の顔に興味をもち、風呂上がりからだの色のいなる部分を撫でたり摘んだりしては神妙な顔をしている。夜は部屋を暗くして寝かすのだが、ふいに目覚めるとは暗闇のなか母親をさがして這いずり回る。漸く母親の腕やからだにぶつかると、安心してからだをひっつけたまま眠る。私もまた同じこどものからだに接触し、きつく抱きしめ頼みずりするが、改めてかんがえたら、他人の皮膚とじかに触れることによつて「おんぶ」を確かめているのはどうやらこどもだけではないようだ。(山口)

★言葉に向かい合い窮屈な想いを繰り返す、幾晩かの後に手練れ、あるいは鈍感になつてゆく頃は、闇に投げ入れし創意の言葉の行方を探しあぐねている。突如、天空から果たしは涙にも似た赤い血を降らせてやってくる、多量多感のイデオロギを秘めて(そんなこともあつた)。そして「私」と「他者」の誤配や遅配という「交換の困難さ」は「応答」における「可能性/不可能性」(現在形)を頭わにしている。いまどきの超高速情報時代に、本紙のスピード感(遅さ/早さ)は「反時代的」で気に入っている。(山本)